

わたしの大切な家族

桜町小・6 梅林 彩乃

わたしの家には、あられという名前のトイプードルがいる。現在二才十か月になった。あられはわたしたちにとって大切な家族の一員である。

わたしは、あられを飼うまで、犬が苦手だった。知り合いの家に遊びに行ったとき、犬にすぐほえられてこわい思いをした。そのこともあり、犬に対してかわいいなど、これっぽっちも思うことができなかった。

しかし、姉の長年の希望で、犬を飼うことになった。初めは、やっぱり犬はこわいと思いきんでいた。しかし、あられが来たときは、生後二か月くらいだったので本当に小さくてかわいく思えた。家に来たときは、あられも初めてのことばかりで、きんちようしているのか全然動かず、えさをあげても食べなかった。その様子を見て、すごく心配になった。まだ、赤ちゃんなので、何でも食べてしまい、一度トイレシートを食べてしまったことがある。何度もはいてしまったので、病院へ行き、レントゲンをとって検査をし、大変だった。トイレの場所もどこにしているのか分からないみたいで、いろんな所にしてしまっていて、すごく困った。でも、トイレの場所を覚えて、成功したときはとてもうれしくて、あられのことをたくさんほめてあげた。

あられが来て数か月たったとき、ひにん手術をすることになった。

ひにん手術というのは、将来子宮の病気になりにくくするためにやるらしい。しかし、手術前に血液検査をしたとき、じゅう医に、「かん臓の数値が高いので、手術ができません。」

と言われ、すぐに手術ができなくなってしまった。わたしは、あられの体がだいじょうぶなのかとても心配だった。それから、あられはかん臓の薬を飲み始めることになった。あられは、薬を飲むことが大変そうで、がんばって飲んでる様子だった。その様子を見て、あられがかわいそうに思えたこともあった。

薬を飲み始めて数か月後、かん臓の数値が手術できる数値に改善していた。すぐにひにん手術をやることになった。薬を飲むことも大変だったのに、手術もやってほしいようぶかな、と心配だった。手術をするため、入院することになった。あられがない日が数日続いた。いつも家にいるあられがないのは、とてもさびしかった。あられがいなくても、考えることはあられのことばかりで、いつもケージにそんなに入らないし、病院ではだいじょうぶかな、慣れないえさを食べられるかな、など心配に思った。

ついにあられが帰ってくる日になった。わたしは学校の日だったが、学校にいる間も、時計を気にしてはやく帰れないかな、とずっと思っていた。家に帰ると、あられがエリザベスカラーという傷をガードするものを付けていた。いつもは、わたしが帰るとものすごく喜ぶのだが、傷口が痛いのか全然来てくれなかった。わたしは、本当にあられが痛そうで、かわいそうと何回も思った。じゅう医の話によると、病院の中で、全然えさを食べなかったそうだ。つらい手術や慣れない病院での生活を小さな体でがんばったのだな、と思った。

しかし、数日経つと、あられもだんだん元気を取りもどしていった。今まで通りのあられにもどっていく様子を見て、わたしも安心した。犬を飼うことで、ふだんはかわいいし、いやされるけれど、大変なことでもたくさんあるのだと改めて思った。

今世間は、ペットブームで、家でペットを飼う人が増えている。しかし、せっかく家族としてむかえ入れたペットであっても、捨ててしまう人がいるそう。捨ててしまう理由としては、大きくなってしまつて飼うことができなくなった、思ったより世話やしつけが大変だった、などがある。二〇二〇年度、全国の保健所や動物愛護センターに飼い主が持ちこんだり、所有者が分からずに引き取られたりした犬やねこは、およそ七万二千匹もいる。そのうち、およそ四万匹がじょうと会などで新たな飼い主などに引き取られている。引き取られた動物たちは、新しい家族のもとで暮らすことができる。しかし、引き取られない場合、殺処分されてしまう。殺処分されてしまったのは、二万三千匹にものぼる。つまり、一日でおよそ六十五匹もの動物たちが殺処分されていることが分かる。人間が、勝手に増やして、自分たちで殺処分するというのは、身勝手すぎるし、信じられないことだと思う。実際にこの日本で起きていることとは思えなかった。動物を安易な考えで飼わない、捨てない、手放さないようにしてほしい。

日本とは異なり、ドイツでは動物の殺処分ゼロが実現している。ティアハイムというシェルターみたいな場所で、さまざまな動物を保護し、新しい飼い主に引きわたすことができているそう。ティアハイムのえさ代やちりょう費などの運営費は、寄付や会費でまかなうことができている。ドイツは、社会全体として動物愛護の精神

が根付いているから殺処分ゼロが実現できているのだと思う。国全体で、動物の命を大切にする姿は、日本でも真似すべきだと感じた。

あられは、わたしが落ちこんでしまつたり、悲しいことがあつたりした時に、ペロペロとなめて、わたしのことをなぐさめてくれる。言葉が通じなくても、なぜかコミュニケーションがとれているような気がする。わたしの気持ち分かるようで、いっしょに寄りそってくれるかけがえのない存在である。

わたしは、これからもあられの世話をして、たくさんかわいがってあげたいと思う。そして、あられに「この家に来てよかった。」と感じてもらいたい。

「あられ、これからもずっといっしょだよ。」